光

第十七號

大正十一年十一月

◇天華香洞録抄……西田天香
◇エックハルトの神秘説と一燈園生活……西田幾多郎
◇ガンディー語録……水上鐵治郎
◇榛名丸から……藤井悌
◇故郷行……磯山松男

同人　懺悔報恩の奉仕者
祈願　不二の光明によれる生活
費用　供養されたる浄財

◇獨白……八田勝三
◇折にふれ……故西田透石
◇幼きものへの供物……松下吉衛
◇悪魔の群……吉田暎二
◇返照録……遠近兄姉

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し、許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し、歸一の大願に參ぜん。

內外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆俱成二就大圓覺一

別願　將二來世界眞平和一

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し、報恩の爲に行乞せん。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の淸規に隨ひ、世諦を成ぜん。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生產業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せん。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天園、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば則ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは箇中の消息、もとより言辭の髣髴し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。

天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規によりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

天華香洞録抄

——（大正四年中のものより）——

西田天香

〇盲從させよ。盲從を喜ぶに至らしむるには、己の德を全うせざるべからず。

〇盲從して行へば即ち自然に了解する也。

〇己、自受法樂に任ず。

次に人頼つて來る（來者不拒 去者不追）即諾。

己、何ものをも與ふるものなし。唯學ばんとならば隨意たるべし。

己、德餘り、福田剩らば、分與すべし。なくばないでよし。無理に分たん爲めに他を蹶かす可らず。

〇己もし戒體破るれば、他を預る力なき也。三寶は眞の佛子に供養して他の人もその人に托すべきなり。

〇戒體とは自然の謂也。

〇超越無相底たらば、七轉八倒も亦可なれども、人を自然に歸らすには、一度戒體を成ぜしめずば危し。

〇迷へる人は戒體を尊しと見る。

〇悟れるものは戒體の內在の尊さを見る故に解脫、七轉八倒底に光明を見るの力あり。

故に一切衆生が爲めに戒體必要なり。玆に戒體といふは眞俗を通じていふ也。

出家道の爲めには出家道の戒體あり。

在家道の爲めには又在家道の戒體あり。

親鸞は自ら破戒無慙といふ。しかも是れ出家道に對してなり。在家道に於ては是れ戒體なり。

〇今や在家道の戒體完成の必要急なり。

〇維摩の出現必要なり。

〇維摩は法身の大士也。此身に維摩を現す必要急なり。

〇釋迦は諸法を諸菩薩に附囑して己は其最深處に根本を握りて安住したまふ。基督は十字架にあり。維摩も方丈に深般若に住す。權現も轉輪聖王も宰相も又維摩たるを得れ共我は其最深處に安居する必要あり。六萬行願は即是我安住の場所なり。たとへ大臣の事を見るも十字街頭に於て見るべし。たとへ一宗を整理するとも又陋屋のうちに於てなす

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

べし。不二の姿は不汚染なれ共、己常に下坐にありて訪ふものをして下坐の所に至らしむべし。…………
如此にして聖德皇太子こ親鸞上人の行履の中を歩むべし是最廣く且深く證明の役に立たん爲めなり。
○釋迦八萬四千の法門を說く。對人方便なり。
○法華三昧に身をおいて爾前の敎を說く。
○六萬行願に身を托して一燈園にも臨み又十字街頭の招ぎにも應ずる也。
○如此にして三世十方に對して深祈禱を爲す。人の知るこ知らざるこ我不關。
○こゝに一人瀕死のものあり。それに臨むも嚴肅を要す。今や世界は、あびきゆうかんの聲をあぐ。豈輕忽なるべけんや。
○米のウイルソン、英アスキス、佛ポアンカレー、英露皇帝更に獨逸カイゼル等は、日本大隈、支那袁世凱等こ共に多忙なる人なり。又墺帝土耳古帝の窮狀苦惱、察するに餘りあり。ブース大將羅馬法皇なごも眼をまはしつらん。嗚呼、され共我等は是等の人にもまして多忙なるべき筈なり。其關する處、十方に廣く其係る處、三世に永ければなり。
○正念相續、是れ千軍萬馬のうちに馳驅するにもまして勇敢ならざるべからず。

○戒體堅固、是れ英雄名宰の心をほしいまゝにするにもよろしく剛毅ならざるべからず。
○けら〳〵笑ふては居られぬ時なり。いつまでも妄想袋を出したり入れたりして居られぬ。
○問題は既に決定せり。たゞそのあるべきやうにありやすからしむるには、宴坐をしてをらねばならぬ、相撲は下手にくまねばならぬ。
○常不輕菩薩を念ずれば如何なるものにても禮拜するこが出來る。況んや己の短をいうてくれるものに於てをや。
○其人の足らぬここを言はんこすれば如何にもいへぬここはあるまい。しかも若し「己の足らぬを省みて人のあしきをいふ勿れ」こいはんこすれば、その事すでに己の犯せるを如何にせん。たこへ、如何なる理由ありこも、若し理由を許さばその人等にもあるべきなり。
若し先方より批評を求むるこきは、己も實行出來ぬのに困れる旨を附言して始めて前言をいひ得べし。他の求むるこき「我はかくの如く愼み又愼まんこ心掛け居れり」こいふは、他の求めざるにかくすべしこいふこ、雲泥の差あり。己いひわけするこき又したき心は、己の短所を改めかぬる心なり。「はい」「改めます」「改めたい」こいふこき又そのいひ得る心は、己の短所を改め得る心なり。改め（自らは）而して他の忠言に極端まで喜んで承引するこきは、直接にはその人を隨喜せしめ、又己自ら利し又間接には其人に自らのなせるを學ばしむる力あり。此人若し是を學ばゞ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

更に他の人の己を省みずに人を批評する言に對して、己を責めて他をいはざるべし。如此は又そのいひ過せし人の自ら慙悔の心を起すべきなり。

威壓していはしめざるはよろしからず。あまへさしていはしむるも亦よろしからず。いふ心自ら消えて己を反省するやうになさしむべし。是れ他なし。いつも如此場合に己を反省する習慣を己自ら作るべきなり。

かくするとき如何なる事も皆己の手元までくれば葛藤は消滅すべし。是消火劑なり。愈之れを增して以て世界の葛藤を消滅せしむべきなり。

人に思案をせずに一行に起てといふ。而も己に此の問題あり。己、一行に起たず、思案に暮れ居ることあるを如何にせん。たとへ一部分にても己行はざることあるとき人に求むる資格なし。求めんよりはその一部分の行はざるを勵むべし。如此は是れ眞に力あるなり。

我は多罪の惡凡夫なり。(解脫すれば此儘如來也といへども、若し如來ならば一切衆生の爲めに戒相具足は當然とあらはるべし）（刻々その狀態あらはるといへども、その足らざる分に對しては、矢張、罪ある惡凡夫なり）（一切衆生は向上の境涯を見る力なし故に躓かさゞらんと欲せば戒相具足に如くはなし）何ぞ人の事をいふの力あらんや。我は多罪の惡凡夫なり。一切の救はれざるは我力の足らず我罪の爲せる業なり。皆懺悔々々、ゆるしてたべ／＼／＼すまぬ／＼／＼。皆懺悔の實は念佛心身を以て擧げざるべからず。眞の懺悔なれば此事伴ふ。此事伴はざれば未だ眞の懺悔を知らざるなり。

懺悔＝念佛＝一信＝無＝無相報恩の行履＝壁立萬仞＝通じて是一なり。故に懺悔は同時に生活の改善と即す。又直入如來地と一つなり。初發心は是成佛の種なり。否その初發心是成佛なり。

○身をいたはらざるは之れ大罪人なり。此身是佛の預りものなり。養生專一、一呼吸といへども苟もすべからず。

○己を盡して他を愛し、而して己の身を以て範を垂れ、如何にせばやと尋ねられるとき、かくしたしと答ふべし。此己を盡して他を愛するとも、別の他の人を犧牲としてまで愛すべからず。如此は自他共にあやまるべし。此體度はいつも壁立萬仞より外なし。己嚴然と戒法を持して、他をしてなれしめず又離れしむべからず。十字街頭に下るも又如何なる事を思ふも己のみをさゝぐべし。而して己その感謝に當るべからず。佛に禮をいはせ。

○佛に養はれし身は必ず價なくして人に施す。佛に養はれし以上は執着あるべき人の施を受けず。若し逆方により少分の受くるものあるときは、直ちに是を佛を念じて淨化せしむ。如此にして與へしとき其人感應あり。あれ共又退轉して財物を徒らに用ゆ。是爲すべき事を知らざる也。之れを別の方法により保管せしむるは一は德を亡ぼさぬ爲めによし、一は他日の爲めなるべし。必ず之をそのもの、名によりて保管せしむ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

エックハルトの神秘說と一燈園生活

西田幾多郎

前回に於て、ギリシヤの終りに出たプロチンの思想に源を發し、中世の終り十三四世紀に獨逸にその開花を見せた、エックハルトの神秘說について論じたが、エックハルトの思想の要點は、智識以上に直覺と云ふものがあつて、言葉をかへて云へば智識以上の智識があつて、そこに於て、自分と他人が一つになり、神と自己が一つになると云ふ、根本思想であつて、その根本思想から種々の差別が生じ、物と我と、自分と人と、色々に分れて來ると云ふことを論じて置いた。

藝術でも宗敎でも道德でも、一度は其處を通らなければ眞實なものとは云ひ得ない。眞善美と云ふが如きも、そこから流れ出て來るものでなければならないものであらうと思はれる。さうでなければ、人意的なものとなる虞があるからである。この點をエックハルトは强く主張したのであつた。一見すれば西洋思想と反したものであるが、その根底にはこの流れがあるのである。東洋の佛敎とは餘程近接したもので、一燈園でもさう云ふのが根底になつて居るのでないかと思はれる。

こゝに問題になるのは無差別と云ふことである。このやうな思想は、無差別に墜つて了つて、唯單に智識を否定すると云ふやうな弊が起つて來はしないかと云ふことである。眞實の處へ行けば眞僞だとか、智識の區別はいらぬのであるが、眞も僞も否定して了ふならば、暗黑い穴藏のやうな處に這入りこんで了ふやうなもので、凡てのものと結びついて生々とした働らきを缺くやうなことになる。善惡と云ふものも、單にこれを否定するなら、何をしてもよいと云ふ無差別に墜つて了ふ。一度は根元へ還元されなければならないのであるが、此缺點に墜つてはならぬ。

エックハルトはさうでなかつたし、弟子のうちにも立派な實行的な人達もありはしたが、なかには隱遁的な生活を送つて人間の眞面目な努力を失つて了ふやうな弊害に墜つたものもあつた。無論普通の智識を唯一の智識とし、普通の善惡を何等の反省もなく持ち續けて固定した差別の世界に蹈躇して住んで居る人は、未だ到らぬ人である。人は誰でも一度はエックハルトの所謂『火花』の處に這入りこんで其處から働き出して來る必要がある。此は難關でもある、けれども大切で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ある。その生死の境を飛躍しなければならないのである。

火花を通して出る純粹な生きた力、これが最も大切なのである。種々な差別があるとゝもに一つに統一され色々に別れて居て又一つである。そこに眞の自由があるのである。智識に於ても、凡ての心の働きを統一して極く純粹に働き出る、智識を超越する智識、スーパーラシヨナルな智識が産れるのである。智識を恐れるのでなくて智識を超越して理以上の理の立場に據るのである。さう云ふ處から出る道徳は、道徳に反するのでなくて道徳を超越するのである。智識を恐れると云ふことをよく言はれるが、智識を恐れるのは自分の生命に弱い點があるのである。未だ眞實なものを把持して居ないが故である。善惡と云ふことも善を善とし惡を惡とするに止まらずして、善惡ともに包含(ほうがん)する處に火花の眞義があるのである。

智識にも種類があつて數學物理學の如き智識と、生命の智識とは直接に關係がないのである。例へば、尺(さし)で物を計るとする。それが五尺あらうが一丈あらうが、それは計られたものゝ智識で、計ると云ふことの智識ではない。計ると云ふことの智識と、計られたものゝ智識とは別である。この机は何尺あるか、計られた何尺と云ふ智識と、計るとはどういふことかと云ふことの智識とがある。パスカルの言つた言葉に『人間は極めて弱いものだ。人間は葦のやうに弱いものだ。だから人間を殺すことは何でもない。一滴の毒でも殺せる。然し人間はかくの如く肉體は弱いが、考へる力を持つて居る葦だ。全世界をもつて押しつぶしても、押しつぶされぬことを知るが故に、考へる力は遙に其上に出て居る。』と云ふのがある。又シルレルの詩のなかに『天文學者』と云ふのがある。天は實に廣大無際であるが、その廣さより以上に考は出て居る、如何に天は廣くても、それは計られたものなのだ。しかし其廣さを知る心は更に廣いとうたはれてあつたと思ふ。かくの如く智識には二通りの智識がある。即ち智識と、智識の智識即ち智識以上の智識とである。後者が生命と結びついて居るのである。物の智識は我々の生命の內容と、內面的關係はないが、智識の智識は、生命と離れることは出來ないのである。かう云ふ意味に於て、眞の哲學は智識の智識でなければならぬ。

智識と宗敎とは關係がないやうに云はれてゐるが、無論關係のないこともあるが、併しそれは智識の意味によるのである。誰も知つて居るやうに、トルストイの人生觀に一大轉機の來たのは、彼の五十歲前後であつた。しかもその人生觀の基調をなして居るものは、ボンダレーフ Bondareff と云ふ無學な無智な一農夫(ムヂーク)から得たものであるとされて居る。その人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

生觀の轉機を示す著書だとされて居る彼自身の著に De Travail (work)『勞働』と云ふのがあるが、それはボンダレーフの言行をトルストイが書いたもので『汝の額に汗して食へ』と云ふのがボンダレーフの人生觀の基調であり信條であつたのであるが、こゝでボンダレーフは眞に無學であり無智であるかゞ問題である。文字こそは知らなかつたが、一つの人生觀を持つた哲學者であつたと考へられるのである。かやうに我々の行爲と智識とは結びついて居るものであると思ふ。正當な智識であるなら正當な行爲と離すことの出來ないものであると思ふ。

普通の智識なり、學問上の理由なり、道德なりがそれらを包括し、それらを纒め得てその上に出て居る高い智識、或は纒め得るが如き正しい智識即智識以上の智識と、衝突する筈はないのである。若し其處に衝突があるなら、何れかに間違ひがあるのである。眞の智は即ち行であり、眞の行は即ち智であらねばならぬ。

例へば物にダイメンションと云ふことがある。平面を二次ダイメンション二次元とされ、立方體を三次ダイメンション三次元とされて居る。我々の住んで居る世界はこの三次元である。普通の智識は二次元に在るのである。然し二次元の世界に於ける普通の智識よりも、もつと深い三次元の世界の智識とは何等の衝突もして居ないのである。さうして二次元の世界を三次元の世界が包含して居るのである。故に前に述べた『火花の狀態即ち凡てを否定した狀態』一に歸された世界に這入つたとしてもすべてが無くなり差別が失はれるのではなくて、立場が明らかになつて、高い世界から見て凡てが明かになつて行くのであらう。

今少し説明すれば、此處に二次元(平面)に住んで居る人間がありとすると、家の垣を作る場合に唯平面上に線を引いて置けば完全に用を達し得るのである。何故なら板に喰つついて居るのであるからである。然し三次元(立方體)に住んで居る人間は、それでは役に立たないのである。飛び越えることをするからである。三次元の人間は戸を立て、其出入を防がねばならぬ。然し四次元の人間が來た場合——四次元は空想だと云ふかも知れないが、アインシュタインの説は四次元の世界を説明せんとする學說である——這入り得るかも知れないのである。電氣は如何に戸締を固くしたとて何處でも傳はるのである。然し四次元になつたとて三次元の世界が消へたのではない。無になつたのではない。四次元の世界が三次元の世界を超越して居るのである。佛教で所謂即して即さないと云ふ境地がそれを指して居るのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

智識の奥に、もう一つの智識即ち超理性的とも云はれ、直覺とも云はるべき流れがある。それが我々に眞實の智識を與へ、我々の生命は、この心の奥に流れて居る智識によつて導びかれて行くのである。例へば、物を見た場合、それが赤いのではない。飜つて赤いとするのである。見たときは一つの働きに過ぎない。唯感覺を刺戟したに過ぎないその感覺の刺戟を、後から型にはめて赤いとするのである。斯くの如く型にはめるのが智識である。故に智識に內容を與へるのは五官でなく、心の奥に在る超理性的な智識である。我々の內奥には、このやうな智識で突くことの出來ぬ、智識の極まつたところに在る或ものがある。動物の本能を考へて見ても、色々の働きをやるが、動物は先き先きまで考へてするのでなく、或働き言はゞ本能の働きに任せて生命を保つて行くのである。然るに人間になると凡て智識で進んで行くと考へられる。人間にも本能はある。又たとへ本能は智識で照し盡し得ても、如何なる理智を以つてしても、照し盡すことの出來ない深いものが、我々の心の奥にある。內面的生命とも云はるべきものがある。これが智識を導いて行くところの心奥の流れである。エックハルトの『火花』といふ如きものがそれである。

我々の心は智識から始まるのでなく、衝動、言葉をかへて言へば運動と云ふものから始まるといふのが、心理學者の考へである。哲學上から見ても、やはりさうなければならぬ。智識は眞實在その者を知るのではなく或型に據つて物を見て居るのである。物自體を知つてゐるのではない。我々が普通に言つて居る世界は後から反省して構成したもので、經驗に依つて後から拵へたのであつて、眞實に我々が生きて居る世界は、智識以上の世界である。始めて我々が見た世界は、我々に從つて色々に變化しながら、流れて居るのである。

藝術の世界に於ては、見ることは、同時に手で働くことである。働くことそのことが見ることである。深い生命を見ることゝ云ふこと、それは働くことである。働くと云ふこと、それは深い生命を見ると云ふことである。畫家はこのやうにして自分でも解らない程、よく知つて居るのである。そこに藝術家が働くことが知ることだ、知ることが働くことだと云ひ得るのである。獨逸のフィドレル Fielder の書いた論文にこのことがよく論じてある。畫家が物を見るのは、我々の見るのとは違ふ。我々は純粹に見ることだけにならないが畫家は純粹に眼になる。見ると言ふことだけになる。これが眞實に繪を作るのであつて、かく全身で見ることから創作の働きが生れて來るのである。畫家が繪を描いて居るときは、手と眼と

一所になつたときで、眼に手を加へたもので見、手と眼で描いて居るのである。畫家が見て居るときは、もはや眼は眼だけではない。眼が全身であつて手も體もその內に含まれて居るのである。畫家が描いて居るとき、もはや手は手だけではない。手が全身であつて眼も體もその內に含まれて居るのである。少し藝術論に這入つて行くかも知れないが、繪は、物の型ばかりを美くしく描いても、言ひかへれば智識的に、考へあかして描いても、其れは生きた繪にはならない。智識以上の立場から描いた時、その繪は生命ある繪になるのである。生きた繪と云ふのは智識以上に生命が流れて居なくてはならぬ。前述の如く全身眼のみで見ることだ。全身眼で見ること、そのことが生命の流れに這入ることだ。そのやうな立場から描くのでなければならぬ。例へば南畫の如きである。形も何もないのであるが、若し智識的に物を寫すのが繪としての價値があるものとすれば、最も價値のないものである。然しほんとうに型を現はして居る寫眞と比して繪の價値が同日に極められないことは論ずるものでもない。然しながら智識以上の立場と云つても、智識に反するのではなく、智識を含んだ處にほんとうのものがあるのである。智識を越へた、其處に智識以上に働く生命があるのである。藝術の創作に當つて工夫を凝らすために骨折つてゐる間は、本當のものは現はれぬが、骨を折りきつたところに、眞實なものが現はれるやうである。智識に於ても、智識に行き詰つたとき、智識以上の立場が解るのである。ほんとの智識を積んだところに、智識以上の智識が解るのである。善惡に於ても、善惡の立場を盡したところに眞に善惡以上のものが現はれるのである。道德に反するのではない。これを超ゆるのである。これを內に包むのである。要するにエックハルトもこの自己內奧の生命に觸れて行つたものである。

最後に、エックハルトの弟子達のうち實行方面に向つた『神の友』Gottesfreund の團體のことを一言して置きたい。調べることは調べたが、教理のやうなことは解つたが、實踐の方法に就いてはよく知るを得なかつた。

十字架像をかけて、それを拜んで居る篤信な商人があつた。しかし後彼は商人を止めて、武士となり、結婚の式の前日に何か感ずる處があつて（キリストの十字架から聞いた言葉によるともされて居る）凡てのものを捨てて、精神修養に入つた。五人位さういふ樣な人々が出來て修養團體となつた。一燈園は他へ托鉢するのであるが、此團體は團體內の一人が一人に從屬して托鉢して修養したらしい。離れた處に散在してあつたやうだが、每日一所に集まつて經を讀むやうなこともしたらしく、當時の學者や宗教家に影響を及ぼしたやうでもあつた。團體に習慣法があつて凡てを處理して行つたもの、やうであるが其れ以上は解らぬ。教理はエックハルトと同じやうなものである。（完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ガンディー語録（抄譯）

水上鐵治郎

印度愛國の志士にして、『非協同運動』の首領たるマハトマ・ガンディー氏に關する紹介は、去る六月本誌に載せて置いたが、左に譯出したのは、アメリカで發行されて居る『サーヴェー』誌の印度特別號に『マハトマガンディーの福音書』として掲載されたものである。因に、私は、かねてガンディー氏の所謂『無抵抗主義』若しくは『非協同主義』といふ言葉をどうかして、氏の言はんとして居る意義で表現した日本語がないかと思つて注意して居つたのであるが、この頃日本史を讀みつゝ、聖徳太子の十七條憲法を見たところが、その冒頭に『以レ和爲レ貴。無忤爲レ宗』といふ文句を發見した。同意義の句を繰返すのは古文の修辭法であるから、和と無忤とは同じ内容を示して居るものと見られる。この無忤といふ文字こそ、ガンディー氏の所謂アヒムサ即ち無抵抗ではあるまいかと思つた。

○

消極的抵抗は、八面玲瓏の劍である。その用、無盡である。この劍を用ふる人には、福祉來る。この劍を以て苛責せらるゝ人にも、亦福祉あり、而して一滴の血をも流すことがない。この劍の用ひらるゝや、その及ぼすところ悠遠である。この劍たるや、銹びず、又奪はるゝことはない。消極的抵抗によつて、碎勵角逐するものは、疲憊することがない。消極的抵抗の劍には、鞘なく、又それを强奪せらるゝことがない。

○

眞の宗教は、形式的宗教にあらず、又習俗的宗教でもない、それは凡ゆる宗教の根蒂たるものにして、人間をして造物主と親しく面接せしむる底の宗教である。

○

民衆に奉仕する者は、人爵を受けることをしない。その人は、凡てを民衆の爲めに捧げ盡した人でなければならない。しかも、私は、諸君が私に與へたものをさへ、諸君に捧げることが出來なかつたのである。『奉仕』といふことを宗教として居る人は、人爵を願ふことがない。もし人爵を願ふやうなことがあつたならば、その瞬間にその人は亡びたのである。私の經驗によれば、救ひを求めて起つた人もあるし、名聞を求めて起つた人もあつた。救ひを求むることの賤しむべきは勿論であるが、名聞を求むることは、そ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

れにも增して賤しむべきである。名聞を求むるが爲めに犯したる非行は、救ひを求むる爲めに犯したる罪より深い。

○

拒否は、受諾と等しく理想とすべきものである。虚僞を拒否することは、眞理を受諾すると等しく必要である。二個の反對せる力あつて、斷えず人間に作用し居り、人間の努力は、拒否と受諾の永遠の連鎖なりとは、凡ゆる宗敎の敎ふるところであつて、惡に對する非協同は、善に對する協同と等しく、我等の義務である。

○

眼醒めたる、自由の印度は、惱める世界に對して平和と好意の指命を有す。

○

愛の力は、魂の力、眞理の力と等しいものであつて、その力の働いた事蹟は、到るところに見られる。愛の力にしてあらずんば、宇宙も消滅するであらう。

○

富を所有すること大なれば、從つて敗德の程度大である。……神と金力とに同時に奉仕するを得ずとは、至上の經濟的眞理である。西洋諸國民は、今や物質主義の邪神の足下に呻吟苦惱して居る。道義の發達すらも阻止してしまつた

彼等は、己が進歩の程度を計量するに金錢を以てして居る。アメリカの富は、その標準となつて、アメリカは各國民の羨望の的となつて居る。多くの印度人は、屢々、我等は將來アメリカの如き富を得ざるべからず、されどアメリカにて行はるゝが如き方法は避けざるべからずと云ふが、斯くの如きことを企てることも、到底成功しないことを、私は敢て斷言したいと思ふ。

○

無智なる狂信者をその誤謬より救ふことは易い。確信ある惡人にして惡事をなさしめざるは難い。

○

悠遠にして眞實なる何事をか爲さんとせば、先づ無畏を必要とする。神を畏れよ、然らば人間を恐るゝことあらざるべし。もし我々にして、我等の身内に一の神いまして、我等が思ひ、又は爲す凡てを見そなはし、我等を守り、我をして眞の信仰に導くことを悟得せば必ずやこの世には、神を畏るゝの外、他に畏怖すべきものはなくなるであらう。

○

印度の聖典には、眞に完全にアヒムサ（無忤）を體得したる人は、世界を脚下に服したる人であると誌されて居る。斯くの如き人はその周圍

の毒蟲すら害を爲すを得ないのである。

○

アヒムサの積極的に表現されしものは、大悲大慈である。もし私にしてアヒムサを奉ずるものならば、私は仇敵をも愛さねばならない。私は、私に對して害をなす敵人或は見知らぬ人に對しても同じ原理に基いて接觸せねばならないそれは、丁度自分の父や子供が自分に對して害をなした時と同じである。斯くの如き熾烈なるアヒムサは、必ずや、その內容として眞實と無畏とを有して居る。人は己が愛するものをば欺くことは出來ない。又愛人を恐れたり、脅かしたりすることはない。生命を提供することは、凡ゆる贈物の中でも最大の贈物である。眞に生命を提供する人には、いかなる怨敵をも和める力がある。斯くしてその人は尊むべき理解に達することが出來る。而して自ら畏怖を脫することを得ざる人には、斯くの如き贈物を人に與ふることは出來ないのである。されば、アヒムサを實行するを得ざるのみならず、斯くの如き人は、卑劣漢にすぎない。アヒムサの勤行には、最大の勇氣を要する。それは、實に勇士の資格中の最も勇士らしきものである。

○

もし人が、魂の存在を信ずるならば、その人は、同時に、魂の力は肉體の力よりは善いものであることを認めねばならない。……山を動かす力あるは、實に愛の神聖なる所以である。この神聖なる律を實踐躬行することこそ、實に我々の責任であつて、成敗利鈍は我等の關するところではない。

○

名譽を得んが爲めに働くといふ思想は奬勵すべきものではない。それと同樣に、苟しくも公人たる以上、遂には自分が世に排斥せられ、棄てらるゝに至ることを知つたからとて、その國を愛することを止めてはならない。奉仕はそれ自らが報酬であるからである。

▽表紙題字は左記から戴かせて貰ひました

心月孤圓、光含二萬像一。山僧不レ然。心月與二孤圓一同時放レ光、如二水投一レ水、唯是一種耳。若爲二二種見一、入二地獄一如レ箭、噫。

有レ人求レ語、卒援レ觚書、以示レ之。

元和六年秋　澤庵野衲、

（右　渡邊孝太郎氏藏）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

榛名丸から

藤井悌

春以來主人が『光』誌上に御ぶさた致して居りますので、せめて渡歐後の通信なりと載せるやうにと松下さんからかれて御所望でございましたが、モト〳〵並はづれてさういふことに神經質な主人の性分をのみこんで居ります私は、ケビンの中で不用意に認めた私への通信など無斷で掲載してもどうかと思はれますので、つひ延び〳〵になつて居りましたが、松下さんからは再三御切望でございますし、出立の際觀音樣のおまもり賜はつて一路の平安をお祈り下さいました天香さんはじめ、盛な送別會をお開き下さいました在京同人の皆樣方へもその後の主人の動靜をおしらせしなければ濟まないやうな氣もいたしますので、ほんの私の一存で手紙そのまゝを載せて頂くことにいたしました。あしからず御諒讀を願ひます。　瑞枝

八月二日　朝　厦門沖にて

○一昨夜上海を出てから空模樣が變だつたが、昨夜半から風浪烈しく、下甲板は盛んに浪に洗はれた。いま上甲板に立つて眺めてゐると巨濤重疊してまことに壯觀だ。船は蛇のやうにうねりを打つて南へ南へと進んでゆく。明朝香港へ着く。

○夜更けてから獨り甲板をさまよつて月下の海を見るのが何よりの慰めであつたが、この一二日空がすつかり曇つたので寂しい。

○上海は世界各民族のはきだめ、秘密と罪惡との生きた墓、偉大なる魔の都である。碇泊二日の間に學ぶところ少くなかつた。

○食物は非常に贅澤だが、三度々々四足二足ばかり、それも冷藏肉だから味もそつけもない。新しい野菜の香氣が戀しい。

○船の日々はたわいのないものだ。恍々として浪に明け浪に暮れてゆく。讀書も思索もできたものでない。むやみにあわたゞしい、落ちつきのない、氣さわがしい間を一脈の哀愁縷の如くに縫ふ。

○友人に手紙を書く暇（主觀的の）がない。「なまけ」ではない、實際書けるものではないのだ。どなたにもよろしく賴む。極めて健康御安心あれ。

八月二日　午後六時　船室にて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

晝頃からいよ〳〵荒れてきた。浪のしぶきと雨と雲とで前面は晦冥である。船はしきりに警笛を鳴らしてゐる。デツキには人の影もない、たゞ椅子が風に吹きまくられて縦横に轉がり廻つてゐる。

ひとり舷棚にしつかりつかまつてしぶきに濡れながら海を眺める。何といふ物凄さであらう。海は巨大なる魔物のやうに踊り狂うてゐる。浪といふ感じではない、何やら異様なものが際限なくムクレあがつて來るのだ。はて知らぬ灰一色の山脈である、それが絶間なく跳躍するのだ。

ドーツ、ゴーツ、ヒユーツといふ間に何とも分らないバチ〳〵といふ音がまざる。その邊がたゞもの〳〵しい。

○乘客には誰ひとり此の嵐を味ふ人がない。大部分は船室に籠つてゐる。落伍しない人だちはみんな社交室に集まつて、むやみに騒がしい蓄音器を鳴らし、高聲で談笑してごまかしてゐる。

○右舷から一町ばかり先に、反對の方向に走る船が一つ見える。しぶきの霧で形ははつきりしないが、前後に烈しく搖られ〳〵て行く姿だけは見られる。あゝ汝惱めるものなるかな。不思議な同情が湧く。

○一切空寂舍。この感極めて切なるものあり。

○嵐のときの海の色はたゞ不思議である。何とも名づけやうがない。薄い青色に薄い灰色がまぢつたやうな、異様な物凄い色である。穏かなときは廣重の繪に見るよりももつと濃藍色であるのに。

○蓄音器はいま長唄をやつてゐる。その貧弱なこと。地球の叫びは大きい。

○この大自然の怒りの前に、わが感受力の餘りに小なるを悲しむ。

○午後七時半、いよ〳〵本しけになりましたと船員がいふ。棚の上のものを皆下して置いてくれといふ注意がまはつて來た。よろけて歩かれない。今夜は下のソフアーに寝るつもりだ（小生の寝臺は上だから轉け落ちては困る）。とにかく猛烈な嵐だ。蓄音器のカラ元氣もいつの間にか靜まつてしまつた。天地をつゝむ嵐と浪との大合奏。

八月七日

晝頃始めて翼の白い鳥が一羽船首を横ぎつて飛ぶのを見る。熱帶の海の單調無味なのに、この鳥嬉しさ限りなし。夕方虹が出た。半天を掩ふ雄大豐麗な五彩の氣。

八月八日

絶えまなくモンスーンに吹かれ涼し。夕方西の水平線上に僅かばかり固まつてゐる雲の中に稻光りのするを遠く望む。

大氣中に纖塵が少いためか、空あまりに澄明にして夕映え

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

もせず。船客悉く倦怠の色あり。

八月九日

波のしぶきに無數の虹が浮ぶ。何といふ透きとほつた美しさであらう。生物性の粘りがちつともなく、純鑛物性のさら〳〵した美しさ。陸上の風物とは全く趣きが違ふ。

八月十日

飛魚頻りに飛ぶ。デッキから見てゐると千鳥のやうに見える。この小動物も懷かしい。四方ともまん丸い水平線で圍まれた洪大な水盤の上をきのふもけふも南へ南へと辷つて行く。堪へがたい寂寥。生きたものなら何でも懷しい。

八月十一日

無事、無爲、空用、落寞。一切懶く張合なし。けふも終日何んにも見えず。船は默々として砥の如き水面を辷りゆく。永久に斯く航すべき運命を持てる如くに。

○搖られ通しのためか船の中では頭が散漫でどんよりしてゐて感受、觀察、思索、表現いづれも殆ど不可能です。船の中でまじめな仕事をしようなどとは以ての外だといつた或る先輩の言葉がほんとうだつた。

○熱帶圈へはいつてから温度は却つて低い（室内八十四五度乃至九十二三度位）、それにモンスーンが絶え間なく吹いてゐて涼しい、けれどもどういふものかむやみに汗がでる。それも濃い油のやうなのがしよつちう出てゐる。さすがの私も湯には毎夜はいり（湯は鹽湯で氣持ちが惡い）、一日に四五遍も水でからだを拭く。その度毎に洋服を着たり脱いだりするのが堪らなく面倒くさい。

協調會立光社乃至一燈園の諸兄に宜しく。母になるべく私の手紙を見せて下さい。明日シンガポールに着く。

八月十四日

きのふ、四時間ばかりの碇泊の間にマラッカに上陸した。ポルトガル、オランダの覇權の跡、今は徒らに名の知れない雜木の中に埋もれてゐる。町はづれの丘陵の上に三百年前のオランダの堡壘の跡がある。物凄い雜木の密林を押しわけて登ると、こわれた壘壁の一部が殘つてゐる。そこに立つて見渡すと、一望たゞ際涯のない椰子の林である。途中の支那人の家の戸口に「雄圖既舊、世界維新」と書いてあつたのが思ひ出される。

日本人の墓に參つた。この町にも日本人が二三十人ゐる。大抵はこゝに埋められるのだ。町の中の家は多く支那式だが郊外へ出ると純マレー式の家が散らばつてゐる。吹き通しの高い床、手すりの附いた階段、綠色に塗つたすだれ、左右へ絞る幕、廻廊から屋根の工合まで一切がつさい日本の神社の通りである。人間も日本人と寸分ちがわない。一體にマレー人は日本人を尊敬する。先日シンガポールで植物園を散歩してゐたら行き違つたマレー人が胸に手を當

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

て、丁寧に一揖して去つた。同種族の先達として景仰してゐるらしい。

○風をひいた。少し熱がある。しかし大體に於て健康だ。

○熱帯地方には「たそがれ」といふものがない、白晝から俄然として暗夜になる。まことにそつけない。

○ガンディーの潛勢力は偉大なものです。けふも自動車の運轉手(印度人)にガンディーを知つてるかと聞いたら He is the best man in the world. と言下に答へた。それから色々聞いて見たが彼は語ることを欲せずと言つて多くを語らなかつた。しかしガンディーの名は彼等の間に呪文のやうな力を持つてゐる。この名を一たび口にすると、彼等の我々に對する態度が變る、好意と信頼とが現はれるのだ。

○けさから時計が一時間だけ遲らせられた。七時半に起きたら六時半だつた。一時間だけ命が延びたやうでもある。

○海はごく穩か、さつき鯨が潮をふいて通り過ぎた、そのほか何にもない。

どなたにも宜しく。

九月二日　ポートサイドにて

昨日スウエズ運河を通つた。兩岸とも見渡すかぎりの砂漠、圓く劃つた白砂の地平線を眺めて來た。そのはてに落ちる樺色の夕日も見た。

○感冒が治らないためカイロへ廻ることができなかつたのは甚だ殘念だ。日本人の一等船客は殆んど皆行つてしまつたので、取殘された連中だけぼんやり船室に籠つて出帆を待つてゐる。粉炭を積みこむので煙のやうな微塵が吹きこむ、それを防ぐために窓といふ窓は皆古新聞紙で眼ばりをしてしまつた。實に暑い。

○紅海は世界で一番暑いところ。風はちつともなく、兩岸の砂漠の照り返しで何とも言はれぬ酷熱である。感冒のため三日間風呂を怠つたら全身に「汗も」ができた。

○けさちよつとポートサイドの港へ上陸して散歩した。モハメット教の寺院へ行つてみた。ガランとした本堂に垂れ下つてゐる新月旗を見るといたましい。

ジプシーの物賣りがうるさい。トルコ婦人は實に立派な胸部を持つてゐる。モロッコ女のダンスを見た。エジプトたばこを買入れた。

○午後四時出帆。もう一週間でマルセーユへ着く。ドイツの情勢はパリへ行つてみなければ分らない。昨日の無線電信に依ると、マルクは底知らずに暴落、一ポンドが六千七百マークになつたといふ。暴動の危險濃厚である。

九月七日

長い航海も終つた、今三時間たつとマルセーユに上陸する。大體健康。(中略)

遙かに御健康を祈る。協調會立光社の諸兄によろしく。母にはなるべく私の手紙を廻して戴きたい。(下略)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

故郷行

磯山松男

大利根を越ゆれば おらが縣なり小さき汽車に乘かへするも（この汽車蠟燭を灯せり）

水張り田は夜目にもしろく見ゆれども蛙のこゑのきこえぬさびしさ

汽車ゆけば切崖に生ふる笹の葉のさやぎいちじるく月影に見ゆ

この汽車は先行かなくに小夜更の十時といふにおろされにけり

汽車降りてふけしづむ夜にひとりなり徒足(かち)行かんと思ふ 六里の道を

くもり來て月ほのぐらし道傍の草葉の露にぬれつつあゆむ

くろぐろと更けしづみたる木叢立雨蛙のこゑしきりにするも

村里の木の間ゆもるる燈火はなつかしきかもよ赤きともしび

この橋の枕木わたる下駄の音たかくはるかにひびきけるかも

深き夜の闇をうかがひすかし見て行きがて居れば雨ふりきたる

しんしんと眞夜のくだちに吹く風のやうやくさむくなりにけるかも

うばたまの闇夜の底を風わたりかすかなるかもよ麥の穗ずれは

おのづから睡とぢつつ歩みけむつまづく時はわれにかへるを

曠野中ぼつつりたてる停車場にひそかに入りてわれはいねにけり

肌寒み眠さむれば雲間もる月はおほかたかたぶきにけり

つゝみより袷とり出し着かへつつ野末の月をみかへりにけり

月落ちてくらさいやまし天地にほのかなるかもかけのなくこゑ

うつうつと線路にねむるわがあたりしらしらと して夜はあけにけり

はてしなき黑田の面にほのぼのと明のいろさし蛙なきそむ

雨雲はあくるまにまにはれゆきて朗なつかしき[illegible]

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

獨白

八田勝三

何時か左官やさんの御手傳ひをさせて貰つて居た時に、

『斯んな事でも十年位みつちりやらなければ、一人前になれねんですぜ』

と聞かされた事があつた。

鹿ヶ谷の地下室の食堂で、その日は正客として座蒲團の上に座らせられ、頂度曙一燈園から歸つて居られた、濱村さんの山仕込みの庖丁振りで、まぜ御飯の御馳走をよばれ乍ら、

『そうだ、私も許さるゝならばせめて十年間東京でぢつと祈らせて貰ふんだ。すれば光はきつと好いやうに導いて下さる。』

斯んな勝手な自惚れを抱いて、京都の道友に別れ、上京したのは昨年の八月廿九日。山北邊りから雨になつて、東京驛頭に傘も無く、無帽粗衣、鞄を肩に、天香さんが秋田へ行かれる豫定だつたので托された毛布の包みを兩手に抱へた姿を省みて、我れ知らず微笑まれたのも早や一年の昔。其間私達の祈りが眞劍であらうがなからうが、祈りの形が現代に適應して居るや否やに論なく、日月丈けは默々と足跡を印して了つた。

さて靜思すれば、事々に悔のみ多く、光を消し勝ちなるも、然も體驗淺き私達が、所有るものには永久に平行線なる、無一物中無盡藏なる境地もおぼろ氣乍ら分り、物質文明の奴隷的生活に食まずして、多き時は十八人の同人が、菩提心に養はれて來た事實丈けは、完全なる獲得として、私達が感謝すべき事柄であると思ふ。

○

過ぐる六月下旬、天香さんが上京なさるとの御消息に、我れ人共にお待ちして居たが、到頭期待に反して、信州から天龍川を下り、名古屋に出でゝ、靜岡迄來られたが、時日の都合で其儘歸洛なすつた。此事は大分色んな人々を失望させたが、私も一寸考へさせられた。

『私達は餘りに天香さんに頼り過ぎて居ないか知ら？一寸難かしい問題にぶつかると眞劍に考へてみないで「一度天香さんに御會ひ下さいましたら……」と逃げて了ふ。それは光を傷つけることを恐れるやうに見えて、却て光を忘却した卑怯な態度ぢやなかつたらうか？體驗者としての天香さんは、最も傑出した先達であり、何時までも祈りの中心になつて居て下つて、永久眞平和の實現さるゝ日迄生きて居て下されば、本當に有難いのだが、人の世の運命は天香さんの上にもやつて來る。それは回避し難い悲しい事だが、その際に處する覺悟を私達同人は充分持つて居るだらうか？或る人は云ふだらう。「その

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

時には光がきつと私達の行く道を示して下さる。私達は明日を思ひ煩ふ事はないのだ」と。勿論私もそれは信ずる。併し私には同人の一部は光に即した生活の探求者と云はんよりも、天香さんの率ゐらるゝ一燈園生活を慕ふて集まられた人が多く天香さんを通じてでなく、光を目標に統一される訓練に至つては、一般的に缺けて居はしないか、又現在の當番なるものが、天香さん百年の後、果して何程の統一力を有するや否やは、悲しいかな、今の所私には疑問である。此の不安を取り除かんには、同人が眞に十字街頭から光と共に歩むこと、唯此の一事が總てを解決し、完全に統一さるゝ基礎にもなるのぢやなからうかと思ふ。』

○

十字街頭より祈る時當番は光である。

人としての當番は一種の行政官に過ぎず、或る時機を過した同人には、これあるが爲に、却てその人獨特の道に出づるを阻害しはしなかつたか、自然法爾の生活を、口入屋に類するものに墮せしめやしなかつたか、當番としての一年餘りを顧れば、無理ぢやなかつたか知らと思はれた數々の事が、嘲笑ふやうに、腦裏に現はれて來る。

『矢張り當番を光に歸すのが至當だ。未だ一人で歩むのが御苦しい方丈けには、已むを得ず、御相談相手として御世話をさせて頂くことにしやう。』

光が私達を過ち無く導いて下さるのを信じて、斯うした心持から、東京では去る十月五日以來、以前のやうな當番を許して頂いて居る。

○

此度、横濱に大變自然的な、私達の禱所に適はしいやうな、小さい茅屋を惠まれた。それは井土ケ谷と云て市外に近い所に、尼將軍北條政子の菩提寺があるが、その山裏に梻の木二本を其儘棟木として、神奈川縣立工業出のM氏が、自ら目分量で御建てになつたものである。位置は麓から一丁餘り上つた山腹にあり、後は屋根庇から山を脊負ひ、東西は樹木が可成多くて防風林をなし、南面せる前のみは、だん／＼畑で、三丁程彼方には別の丘陵が起伏して居る。建坪は五坪餘り、部屋は四疊半一間で、一間の床に半間の押入、鈎の手になつて居る板間には爐がきつてあり、其他便所、土間、椽側等から出來て居る。材料としては長屋に使用されて居た古木を骨子として、簾、藁、茅、あんぺらなどを用ゐ、壁には土が塗つてない。建築費は坪當り僅か五圓を出でず、但し大工さんは御主人とその叔父さんの二人きりで、二月近く費つたそうだが此の手間は計上されて居ない。で八月始め迄は、M氏夫妻と昨年の暮生れの赤ちやんの三人暮しでいらつしたが、麓迄飲水を汲みに下りなくちやならない不便は、産後の日だちのよくない奥樣にとつて、大きな障害となつたので到頭移轉なさる事になつた。それで引拂つた後を其儘で置けば、乞食の住居になつて火事でも出されると困るし、一層壞して了ふか、肥料小屋にでもなさる御意りだつたのが、私達の生活を御承知になり『お役にたてば何卒お使ひ下さいまし』との御言葉に甘へて預からせて頂く事になつた。だが無所有の私達とて、水蜜糖の箱が郵便受を勤め、瓢簞の一輪さしに同じく香爐、竹筒の線香入れ、木魚はわさび漬の桶を底を鋸で引いて了つて伏せて代用させてあつたが、此の程瓢を半分に切つたのを、左手に逆さに持ち右手の拳を固めてほか／＼など、いつて居る有樣。人には茶番のやうにも思へやうが、持たないと始めて眞の感謝が味へる。小やかな山の家が光の名によつて、より有効に使用されん事を私達は祈らせて頂かう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

折にふれ

故　西田透石

やみのとこ　うたよみたくなりにけり
いたむこのむねわすれんとおもへば

はくねつか　きよきつとめに　さゝげたる
とものひとみは　かがやきてみゆ

永い病苦の峠も漸く過ぎ去つたやうな氣がします。去る四月から、今日が日まで、可成りに惱ましい日の連續でした。或時は發熱の發作に、氣も狂ひさうで、いーら〳〵して、唯銳い神經のみ、メスのやうな閃きを、放つて居ました。又或時はふら〳〵とする眩暈(けんうん)の爲め其場に殪れさうになつたことも一二回御座いました。隨分と私は、やせ衰へて、骨と皮とまで行かなくとも、やせて行く事實は可成りに私の神經をいら〳〵させました。堪へきれぬ暑さの中を潛つて、出來るだけ病を養ひました。半年に近い今日が日まで、ツベルクリンの注射を受けて居ます。靜かに西日に浴して、過去の追想を繰り返して居ると、何時か、感謝に滿ちた涙が流れて來ました。さうして切に歌でも作つて、餘りに寂しい自分を慰めたくなりました。

不治の病とは、言へなくとも、可成りに危險な病魔に犯されて居る私は、病氣を養ふ爲めに、是非自らの生を喜ばねばなりませぬ。不健康である自分の生を、祝福せねばならぬのは、實に、堪へ切れぬ事實です。その胸の痛みを、忘れて行くことに於て、自分の不健康は救はれるものと信じます。折にふれ、それを詩歌に生かして、祈つて行かうと思ひます。

自分のやせ衰へるにつれて、自分の友達の勞働、生命にあふれ感激に湧き立つた生活を、羨しう思ふて、人知れず、弱者の悲哀を痛感しました。

ともおもふ　わかみのさらに　おとろへし
とふときこのひを　なやまんとするか

自分は何を考へ耽つて居るのか、解らない。すべてを病的に考へるのが病人の癖です。友が元氣なのに比べ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

て、私は餘りに弱り切つて居ます。餘りに惱ましう思ふ自分を鞭打つて見ました。

かすかなる　ねつにもむねは　とゞろきぬ
めすのごとくに　するどきしんけい

發熱の場合、胸の動氣が劇しく打つものです。幾ら高熱でも或時間さへ過ぎれば、又、出來るだけ靜かに、息を深く呼吸して居れば自然と熱は醒めるものです。それなのに今熱が出た時にはいくら落ちつかうとあせつても、益々神經が鋭くなるのには、悲しう思ひました。

よはふけぬ　ねむれぬまゝに　めをとぢて
はいやみてしせし　おぢをおもひぬ

きゝこして　なわなふこらの　すがたみて
すぎにしひのゆめ　わがこゝろおごりぬ

――一九二〇・九・七作――

ふそんもの　かみのみまへに　ひざまづき
つみのこゝろに　なきいりにけり

はんとしを　まちたまひそこ　つけたまふ
きみのこゝろの　うらめしきかな

あさおきて　つめたきみづに　みをひたし
こゝろゆくまで　そらをみつめぬ

うらやまの　ひおもてにたちて　いきぶかく
すへばうれしも　こゝろはるかに

ゐごがへに　あしすべらせて　おちたまふ
こものよこがほ　あほざめてみゆ

かなしくも　にしびさすなり　やみとこの
しろばらのはな　めがねにうつり

すぎしひの　もだえをかたる　ながきかみ
けふはもきらむ　なみだしながし

――一九二〇・九・一四作――

朝顏の　色あせにけり秋の雨
さびしらにしてわがみおのゝく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

黒髪を梳りたまひし母上の
あつきなさけに額づくわれは

——一九二〇・九・一五作——

あかくと桐の枯れ葉に西陽さし
おそあきの野に風さわぐ見ゆ

夜は更けぬ深き傷手に泣く君の
まさち祈らばやさきくまさきく

——一九二〇・一〇・二〇——

懷疑の聲

勞働服にハンマー執れる吾姿よ——
時は時へと流れ行く
おゝその永劫の流れに掉さしぬ。
されど我心おだやかならず
或時は肉の躍るをみぬちに感じ
或は不安の影に泣く
おゝこの心の動搖よ。

恐ろしいまでに急速に
時は過ぎ行く
されど在るは懷疑の暗
惱ましき惡魔の夜
あはれ現實の事實に
戰く我となりしか——

我パンといのちを需めんが爲め
家を出でぬ
パンを得るはいと安かりき
されどいのちは……
我心饑餓に泣く孤兒の心に似たり

暗を照らす光——
我祈りに潛めど
現實の潮は
魂の安住を崩して
刹那の歡樂に我を誘ひぬ

情熱もて青春を飾り
甘さに醉ひて刹那の歡樂に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

踊り行かんとするか
はたまた灰色もて被はれし
禁慾の獄に生くべきか
みつむれば我前に
二道の路走れり
何れ行くべき――

「憂患に生きて安樂に死すべし」と
偉大なる殉教者の言葉は
心に響きぬ
されど荒びたる身は
惱ましき魔の手に虐れ
傷きては泣き續けぬ

――一九二〇・二・一一朝――

幻影の舞踏

忍びよる寂寥と惡魔のさゝやき――
病院の深夜を
我は白きベッドに横はる
病みつかれし魂のあがきか
いま身ぬちに發熱を感ず
夢魔に食まれし夢のきれはしか
冷へはてし大理石像の如く
我は薄暗き病室の片隅に
泣く力も奪はれて打ち振へ居たり

突如、暗を照らす燭光
炎と燃へて
幻影の舞踏は描き出されぬ

裳裾ひける美女の妙藥に醉ひて
おゝ踊り狂ふよわが天女
憧憬の少女
いくそたび我に接吻けては
おゝ踊り狂ふよ

踊り疲れし少女は
泣きぬれて我が傍へ
白きベッドに近づきぬ
囁く聲はあれど

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

應へすべきよしなし
やせ衰へ骨あらはなる胸に
少女は純潔を誓ひて
生命さゝぐと泣き崩れど
おゝ我に抱くすべなし

妙藥は絕えたり
燭光は底知れぬ闇にのまれぬ
熱は高潮に達し
夜は更にふけたり

拭へども拭へども孤獨に泌む淚あり
幻影の少女は來らず
あはれにも我は
暗にK子の名を呼ぶ

——ヒメイ病院にて——

小鳥のおみまひ

さびしいさびしい山里に
ちひさなちひさな病院が
ひとつしよんぼり立つて居た。
白いベッドの窓ぎわに
楓が一本ありました。

毎日毎日名も知らぬ
神經質で臆病な
可愛小鳥が飛んで來て
胸をいためた少年の
寂しい眠りを見舞つてた。

若しかこの子が泣いてたら
小鳥もいつしよに泣きました
楓の枝にしよんぼりと
若しかこの子が笑つてたら
楓の枝をゆりながら
小鳥は得意の宙がへり。

朝早くから日暮れまで
優しい小鳥のおみまひで
胸の痛みも寂しさも
忘れるやうになりました。

かうして二人はだん／＼に
仲よくなつて行きました。
小鳥に言葉が解るなら

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

若しかこの子にあの歌が
小鳥の歌が解るなら
二人はきつこ抱き合つて
聲をそろへて泣いたでせう。

——ヒメイ病院にて——

ミレーの『種子播き』を見て

自分はミレーの「種子播き」の繪を
ぢつこ見詰めて居る——
何時まで其繪に見入つて居ても
決して見飽きるこ云ふここが無い。
恐らく自分だけの感じでないであらう
萬人の心に觸れる何ものかゞあるからだ。
ほんこうにミレーのやうな偉大な人が
自分等の過去に住んで居たこ思つたゞけでも
自分等のこゝろは波打つ。
「種子播き」の繪は
萬人の心に響き渡る
愛の祝福だ
おゝ描かれたる宗教だ
質朴で雄々しい若い農夫が
廣漠たる大自然を前に——

おゝ地を踏みしめた足は
大地から生へ拔けたやうだ。
膏こ汗に塗みれて
濡れかゞやくその額
大きな大きな肉刺だらけの手から
種子はまかるゝ——
播かるゝ種子は神の愛
播く手に勞働の精神は淨められ
祝福のまここが畫面に躍動する
身こ心に感ずる藝術、描かれた宗教。

ミレーの一生を貫く貧苦こ忍從のしたゝりが
この繪の基調をなして
そこに神の壯大な交響樂はひゞく。
　汝の額に汗して
　汝の生活を得ん
　長き勞苦こ悲痛ののちに
　死はいま汝を襲ふなり
永劫に消ゆるここのない箴言が
現實の谿間を超え
人間の痛苦をこほして
勇敢な魂の行進を續ける
おゝミレーはいま自分の心に生きて來る。

——一九二〇・八・三——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

幼きものへの供物

くつやのおぢいさん

松下吉衛

さむい／＼北國の雪の日の話です。

くつやのおぢいさんは、朝からせつせとはたらいて居ます。なかよしの唯夫さんに、くつの手いれをたのまれたので、早くなほしてやらうと思つて、さむいのをがまんして、一生けん命、やつて居るのです。

ガラス戸ごしにおもての方をながめると、いく日かふりつゞいた雪は、道に何尺もつもつて居て、風さへひゆう／＼ふきすさんで居ます。もう、ひる近いのに、めつたに人通りもありません。ほろ／＼のきものをきた、少しこしのまがつた年よりの雪かきが通つたのは、よほど前のことです。

おぢいさんは、手がかぢかんできて、しごとがやりづらくなつたものですから、

『おゝ、さむい／＼！　けふはどうしてかうひえるのだらう？』

と、ひとりごとを言つて、兩手をもみ合せながら、いろりの方へいきました。

火ばしで火をかき立てなどして、しばらく温つてゐるうちに、ふと、おもての方を見ると、大へんやつれたかほの女が、赤子をかゝへたまゝ、しよんぼり立つて居るのが、おぢいさんの目にうつりました。

女の人はかさもさして居ません。かなり遠くからあるいて來たらしく、よほどつかれたと見え、足をひきずるやうにして、時々立ち止つては、あるいていくのです。

血のけのないほゝ！　よわりきつたまなざし！　ほろ／＼のきもの！　そのやうすが如何にもあはれなので、おぢいさんは見るに見かね、ガラス戸をあけて、かう話しかけました。

『まあ、お前さん！　赤ン坊がこゞえじにしさうではないか？　さあ／＼、どこのお方かしらないが、こちらへおはいり！』

おぢいさんは、かう言つて、女の人を内へいれてやりました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

女の人は『ありがたうございます〳〵』と、くり返しながら、何度も〳〵おじぎをして、入口のところで、きものやづきんについてゐた雪を、力なさゝうにはらひのけてから、おぢいさんについて、はいつて來ました。

おぢいさんは、女の人をいろりのそばに座らせて

『ゆつくりとおあたりよ！　赤ン坊をようくあつためておやんなさいよ！』

と、しんせつに言ひますと、女の人は、もう、うれしなみだを一ぱいにうかべながら、

『はい、ありがたうございます。おかげで助かります。私は、これから、まだ一里あまりもあるいて行かなければなりませんのですが、手足はこゞえる、この子はなく、のませたくも、ちゝは、ろく〳〵出ませんし、だん〳〵くたびれてはきますし、ほんとにどうしようかと思ひました。あなたさまでも、およびこみ下さいませんでしたらどうなつたかわかりません。』

と申しました。

おぢいさんは、赤ン坊がさむさうでなりませんので、女の人のことばがとぎれると、おくのまへ行つて、毛布をもつて來て、赤ン坊にかけてやりました。しばらくすると、今まで青ざめて居た赤ン坊のほゝが、ほんのり、あか味をおびてきました。そして、めがねをかけたやさしいおぢいさんの顏を見ては、にこ〳〵して居ます。

それからおぢいさんは、くずゆを、おいしくこしらへて、赤ン坊と赤ン坊のおかあさんに、のませてやりました。

女の人は、ありがたさが、むね一ぱいで、ことばは口に出ませんでした。いよ〳〵、お別れするときにも、たゞむごんのまゝ、なみだをためた目を、おいのりでもするやうに、ぢいつとつぶつて、あたまを下げて行きました。

おぢいさんは、また、この日、あはれな人に少しでもお役にたつことが出來たのを、神さまにおれい申しました。

雪は、夜になつても止みませんでした。

□天香師の東上　十月十三日朝東京驛御着。同夜九時上野發仙臺、福島に講演に行かる。十七、十八日御在京、河村緘太郎樣方市田照之助樣方井上範樣方櫻楓會托兒所等で講演接客。十九日朝群馬縣太田町行、郡教育會で講演、午後足利市で中森原田兩氏に招かれ、夜栃木町に赴き黎明會主催の講演會に臨まる。二十日朝栃木發、東京驛でN氏と會見の後、靜岡に向はれた。

□亠光社から　十月五日の例會には水上兄のガンディ論をきかせて貰へた。出席者十八。松下氏著亠光社パンフレット一部廿錢がお蔭で大分讀まれつゝある。御批正の榮を得たいと著者はいつてゐる。

惡魔の群

吉田暎二

第三幕

第一幕と同じ寺の本堂。太い圓柱が立つ。正面が内陣で、大きな佛壇。其の左右は几帳が深く下りてゐて位牌檀が少し見える。
左右は廊下で庫裡と僧房に通ずる樣になつてゐる。佛壇には燈明。その前に經机。鐘。木魚。
（幕が明くと老僧始め乙、丁その他十二三人の僧侶が、今讀經が濟んだと云ふ態で並んで居る。一人の鐘の合圖で皆は禮拜をする。それで、乙、丁及數人の僧侶のみ老僧と共に後に殘り、他は皆々僧房の方へ去る。暫くの間。その間、僧乙、しきりに四邊を見廻してゐたが。）

乙――はて、甲殿はどうなされたらう。さつきのお勤めの時も見えなんだが。

丁――僧房の方にでも居られるのでせう。

乙――でも何も用のあるわけはないが、それにお勤めならば、何んな用があつても、此處へ來なければならないのを………。はてな、さつき私と云爭をしたので、まだ怒つてゐられるのかもしれない。………それにしてもお勤めには出なくてはならないのだが………

丁――身體の工合でも惡いのではないでせうか。

老僧――さうだ、あれも身體が弱いからな。

乙――いや、今日許りではないのです。近頃かうした事が屡々あるのです。もう三度や四度ではきゝますまい。

丁――都合惡く何か御用があるのではありますまいか。

乙――いゝえ。何も用のある筈はないのです。勝手にお勤めを怠つてゐるのです。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

丁――でも、この間は町に買物があるからと云つて出て行きました。
乙――いつでも、何の彼のと、云譯をこしらへては出て行くのです。
丁――でもこの物騒な晩に外へ出る事も、まさかありますまい。きつと身體の工合でも惡いのでせう。
乙――然し、近頃の甲殿の落付きのない樣子は誰れでも御存じの筈ですからね。
老僧――落付きのなくなる事は、若い時は何度もあるものだ。その爲めに、其處ら中を歩いて見たがりもする。寂しいからだらう。若い心によく寂しさは宿るものだ。それをとがめる事も出來ない。わしもその心持は味はつた事がある。
乙――然しお師匠樣、お勤めまで怠つて所々方々をほつき歩く樣な事は決していゝ事ではありますまい。若さの寂しさも私にはわかります。しかし、それを醫す爲めの念佛ではありませんか。寂しさにもだえる心も、念佛で、唱名で、隨分慰められる事も御座いますから。
老僧――若いものは其處まで行けないのだ。念佛と融け合ひ切れない寂しさが若いものにはあるのだ。それは若い者は、若さに醉つてゐるから。それが、何かの打擊にあつた時、一時に醒める。而して、念佛に救ひの道を求めるのだ。念佛に突き入つて行くより他に仕方がなくなるのだ。これはわしの生涯がよく物語つてゐる。
乙――然しあまり甲殿を其儘にしておく事は他の人々の爲めにもなるまいと思ひます。それに何か用事にかこつけて、外へ出るのはいゝ事ではないと思ひます。事實が、若さに醉つた足取りで土の上を思ふ存分步き廻りたいとか、人の顏を多く見たい、賑やかさがほしいとか、云ふ爲めの外出であつたら、それを有りの儘に云へばよいのでせう。
老僧――甲にも惡い處はたしかにある樣だ。わしから、いつか云つてもよい。しかし、あまり人の事は責めない樣におし。何か外に原因があつて外出をするのなら、そのわけも私がよく聞いておかう。云つても差支のない事を云つては惡いと思つてゐる人が多いものだ。甲もきつと云ふ事を惡いとでも思つてゐるのかも知れない。
乙――甲殿には到底云へますまい。
老僧――お前は、そのわけを知つてゐるのかい。甲の落付かないわけを。
乙――うす〴〵存じて居ります。甲殿は隱れて戀をしてゐます。（何となく勝誇つた樣に云ふ。）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

老僧――（苦しさうな顔をする）さうかい。（間）それで落付かないわけもわかつた。しかしゆるしてやつてお呉れ。あまり責めない樣にしてお呉れ。

乙――お師匠樣は、それだけの罪があつても、甲殿をお赦しになるのですか。（不服さうに云ふ）

老僧――赦すより他に仕方がないと思ふ。しかし、甲には何かの序によく話して見よう。私達は裁く事は出來ないからね。…………殊に私には。私は戀に對してしつかりした考へがないのだからね。

（この時、右手の僧房に通ずる廊下から甲、C子の手を引いて駈け込む。一同驚く。）

甲――お師匠樣、只今町へ、どんな樣子かと見に參りました處、この女人が敵の侍達に…………（と云ひかける）

乙――（強く遮つて）甲殿。そのざまは何んです。お勤めにもお出なさらず。この危險な町へ、しかもこの闇夜に、何をぶらぶら歩いてゐられたのです。その血走つた眼は、どうしたのです。（甲の衣に血の付いて居るのに眼を付けて）おゝ、衣に血がついてゐるではありませんか。どうしたのです。そして、女人を連れて來たりして…………

甲――（乙の言葉に答へる事が容易に出來ない）…………町で敵の侍につかまる處を、救つて來たのです。

（とやつとC子を省み乍ら云ふ。）

乙――それはいゝ事をしましたね。然し御自分の好きな女だけ救はないで、もつと他の人も救つて上げればよござんしたね。（と皮肉さうに云ふ。）

甲――（ギクリとして、無言のまゝ乙を見守る。一瞬の靜寂が漂ふ。）

乙――（勝誇つた樣に）甲殿。私はあなたを責めたくはない。若い人は戀もする。それは惡くはない。それが眞劍ならば。と云つても、あなたの戀を眞劍でないとは云はない。が、あなたの隱れて戀をされてゐる事が、よくないのです。又その爲めにお勤めは怠り、心は落付かなくなる。それが惡いのです。又町の人にその隱れて遊んでゐる事が見付けられでもしたら何うなさる。町の人々は僧侶の身であり乍ら、なんの樣だ、と云つて罵るでせう。それは延いては私達僧侶を罵る事になり、終には佛さまをも罵られる事になるでせう。その時、あなたは何うなさる。佛敵ではありませんか。先刻あなたは私を、議論の時、惡魔だと云はれたが、さうなればあなたこそ立派な惡魔だ。恐ろし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

い事ではありませんか。（間）戀もよろしい。又妻を持たれてもよいかもしれない。しかし、だからと云つて、その爲めに道を忘られては困りますからね。外の人のしめしがつきません。あなたの爲めに他の人々の精進が退轉する樣になつたら大變です。戀は少く共第二義です。第一義は法です。道です。…………又戀は戀で、なぜ隱れてなどなさる。なぜお師匠樣にでもお話にならぬ。（又皮肉に）然し、それに沒頭なさらうとするには、その方がいゝのかもしれないが…………

（こゝまで來ると、甲は默つてゐられなくなる。）

甲――なぜ戀が第二義です。私は戀に向つて眞實です。まことの魂をもつて向つてゐます。それは佛の道に對する心と同じです。佛に手を合はせて得る悅びは、戀にも具はつてます。躍上る樣な喜びです。私は佛を愛する心で、あの女を愛せる樣にと願つてゐます。

乙――これは理不盡なことを聞くものだ。佛も人間もあなたはごつちやにしてゐる。

甲――ごつちやでいゝと思ひます。それでなくてはほんとうでないと思ひます。佛に祈る心持で男にも女にも對するこそ眞の道です。…………（しみ〲と）私達がどの位愛し合つてゐるかを知つて下すつたら。

乙――しかし、その隱れて…………（と云ひかける）

甲――隱れて戀をしてゐた事については、私は何とも申譯がありません。御師匠樣、どうぞ、それはお赦し下さい。私は弱かつたのです。お師匠樣にどうしても打開ける事が出來ませんでした。いろ〲と嘘をこしらへてはお勤めを怠りました。それはいくらでも責めて下さいまし。…………私は、物をかくす恐ろしさを十分知つて居りました。知つてゐ乍らお話出來なかつたのです。私は苦しみました。而してその苦しみを愛の喜びで打消さうとしてゐました。…………又このC子を連れて來た事も、おゆるし下さい。まだ町が、こんな騷ぎにならない前に、C子は私に手紙で會ひたいと云つて來たのです。その中に町は戰爭になりました。私は、とても出られないと思ひました。又出てはならないとも思ひました。しかし、C子は約束を守つて例へ戰爭の中でも、會ひに出かけてくる事を私は知つてゐました。それだけに眞實さは私達にあると思つてゐました。それで到頭お勤めを怠つて町へ出ました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

丁――それで無事でしたか。

甲――方々の辻や、往來で私は數多の酷たらしい光景と出會ひました。それでもやつと(C)子と會ふ事は出來ました。けれども、やがて私達も或る爭鬪の渦に卷き込まれてしまつたのです。それをやつと逃れて連れて參りました。どうぞこの女を隱して下さいまし。お願ひ出來ませんでせうか。道々敵兵達の話を小耳にはさんだ所によりますと、彼等は町の若い女は悉く召上げるか、强奪するのださうで御座います。おそろしい。(と自らおびえる。間)私はどこまで我儘なのか知れません。けれども、どうぞこれだけはお聞き下さい。私には、このお願ひをするより外に仕方がないのです。

乙――なんと云ふ云ひ草だ。自分の好きな事許り云つてゐる。あきれて物が云へない。(と吐き出す様に云ふ。)

甲――(それには耳をもかさず)御師匠樣。どうぞ、これたけはおゆるし下さい。私をお責め下すつても宜しう御座いますから………………

老僧――(甲の我執の强い我儘な心持に、苦しさを感じ乍ら、それでも戀するものゝ、必然的な我儘を赦す心で)あゝ、ゆるすよ。ゆるすとも。私はお前が自分で惡いと思つてゐる事を知つてゐる。佛樣によくお赦しをお願ひおし。私も共にお願ひしよう。

乙――お師匠樣。甲殿をお赦しなさるのですか。この女犯の罪人を。かうして女まで連込んで勝手な事を云つてゐるものを――

老僧――私には裁きも、罰しも出來ない。これも私が惡いのかもしれない。ほんとの事が云へない自分の短所のせいかもしれない。

乙――いゝえ、やはり甲殿がわるいのです。私はこの儘にしては寺の掟が亂れると思ひます。大勢の人々の取締りが出來ません。

老僧――それでは、どうしたいと云はれるのです。

乙――私は人を責めるのは惡いかもしれません。が、私は甲殿によく考へて貰はなくてはならないと思ひます。而して處

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

決して頂かなくてはならないと思ひます。寺の爲め、法の爲めに。

（老僧苦しさうな顔をして無言。）

甲殿、よく聞いて下さい。…………

（その時まで、首垂れてゐたC子が頭を上げて、乙の言葉を遮つて）

C子――乙樣。あなた甲樣に何か仰やる事が出來ますの。

乙――何がです。一體あなたはなんです。女の身であり乍ら、のめ〳〵と此處に來られた譯ですか。

C子――乙樣。あなたは何處まで甲樣を御苦しめにならうとなさいますの。あなたは隨分御立派な口をおきゝになります事ね。（漸次、理性を失つて來る）御自分でやましい、と御考へになりませんの。甲樣に恥をかゝせ樣となさる御心も、私達につらい目を見せ樣となさる御心も、みんな御自分の爲めの復讐なのですね…………

乙――（遮る樣に）えゝ。うるさい。あなたの知つた事ではありません。默つてゐらつしやい。

C子――默りません。あなたは御自分の戀の叶はなかつたその腹いせに私達を苦しめ樣となさるのです。（他の僧達、乙に驚きの眼を向ける。甲は光に會つた樣な面持になる。老僧はたへられない樣な表情。乙はC子の言葉を、多大の狼狽を以つて駁さうとするが、その暇をも與えずにC子は續ける。）私はちやんと知つてゐます。あの時の怨みをいつか晴らさうとなすつてゐらつしたのでせう。而して今日甲樣と議論をして、風向きが惡くなつた時、それを私達の秘密を發く事によつて塗り隱さうとなすつたのです。何と云ふ卑劣な事をなさるのです。甲樣と私との隱事を發く前に、なぜ、御自分の戀を懺悔なさらなかつたのです。それがほんとだらうと思ひますわ。私は何んにも知らない親なし子の、田舍娘ですけれど、甲樣とお話をする樣になつてから、どれだけ種々の事を教へて頂いたかわかりませんわ。佛樣と云ふ事も段々わかりかけて來ました。それを有難い事に思つてゐます。甲樣は、あなた見たいな人ではありませんわ。もつと眞心があります。あなたから叱つたり、處決を進められて頂く必要のある方ではありませんわ。（既に夢中の樣になる）み、みなさん。乙樣は、私に言ひ寄つたのです。それで甲樣を敵にしてゐるのです。（と叫ぶ）

乙――（怒つて）さう云ふ。あなたも人の罪を發いて己を隱さうとするのではありませんか。（罵る）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

老僧――（たまりかねて）あゝ、もうわかりました。もうお互にお控へなさい。みんなの心持は私によくわかる。無理もないと思へば、誰の云ふ事も無理はない。盗人にも三分の理はあると云つてゐる。けれども悪いと思へば、みんなが悪いのだ。それはみんなが自身でわかつてゐる筈だ。甲にしても、乙にしても、私が導く力が足りなかつたからの事だ。その爲めに他の一人をも苦しめたのだ。みんな私が悪いのだ。ゆるして貰はねばならない。みんなも許し合つてお呉れ。而して自分自身をよく考へて見ておくれ。何處にも「自分の爲め」と云ふ心持がない様にしなければならない。要するに「自分の爲め」の罪なのだから。我慾の罪なのだから。私にはこの事件に就て威張つた口はきけない。私の歩んだ様な道を、今甲が歩んでゐるのだ。私は今まで皆に何も話さなかつたけれど、私も女と云ふものゝ爲めに可なり苦しんで來てゐる。

（僧達、老僧の顔を見込む。C子も不審の思入。異常な沈默が一瞬ある。）

私は懺悔するが、私の弱かつた爲めにある女の人に子まで産ませて了つたのだ。まだ若かつた私は、愛も戀もわからなかつた。而してわからうとして苦しんだのだ。初め私は女から離れてほんとの愛をその女に送らうと思つた。それは弱い考へだつた。意氣地のない考へだつた。けれども其の時分の私には、それさへやつとだつたのだ。離れてゐれば互に傷付け合はずに佛様の御慈悲の様な愛が感ぜられると思つてゐた。それで、丁度この寺へ住職になるについて、その女を京都に殘して置いたのだ。女は私の心持は知つて呉れなかつた。しかし、自分の心持を強ひるだけの自信が私にはなかつた。のがれる様にして此處へ來てしまつた私は、私が望んでゐた様な立派な愛にその後生きる事が出來たかと云ふと、やつぱり駄目であつた。女の顔や容姿を見ないでは、落付いた心持になれなかつた。私はそれを恥しいと思つた。佛様に一心になつて手を合せた。而して一心に女の幸福を祈つてゐた。その間が一番苦しかつた。何度京へ上つて女に會ひに行かうとしたかしれなかつた。けれども、その度に自分の意氣地なしを笑つては耐へた。而してその苦しさを自分の生活の糧にしやうと試みた。その苦しさを生かして自分を深くしたいと思つた。それまでの私は信仰と戀とを別々に感じてゐた。けれども、その時分からその區別がわからなくなつて來た。戀も信仰だと思ひ出して來た。それでなければ、私の生活は解釋が付かなくなつたのだ。私は法を高いものと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

も思はなければ、戀を低いものとも思へなくなつた。純な心の働きは、つきつめればみな信仰になると云ふ事を私はその時に知つた。而して佛に合はせて祈る手で戀人の手をとり、その心を抱かなくてはならないと思ひ出した。私の愛や戀に對する考へは、朧ろだつたのが、かうして漸次はつきりして來た。段々女から離れてゐる事が苦しくなくなつて來た。而して一人の女をも、ほんとに愛し得なかつた自分を恥しく思ひ、同時に私の爲めに傷付けられた其女にわびてゐた。而してその罪を佛樣にお赦しを願つた。又愛し終うせなかつたけれど、戀人としては生きられる樣にと祈つた。其處へその女は私を訪ねて來た。

丁――このお寺へで御座いますか。女の方の方から。

老僧――あゝ。私の子が出來てゐる事を知らせに來たのだ。私は驚いたり、恐れたりした。しかし私は一切を上げて、その女の爲めに盡さなければならないと思つた。而して寺の一室にその女を置く事にした。

丁――このお寺に、………而してお師匠樣のお心持は別にお變りも御座いませんでしたか。

老僧――私は目の前に女を見ても亂れないだけの心のたしかさが出來てゐた。時にはそれが曇つたりしたけれども、佛樣はいつも私をお守り下すつた。私は心の中で前よりも、もつといゝ試金石が私の心に對つて與へられたと思つてゐた。而して純な一すじの心で女の心を抱いたつもりだ。しかし女はまだ私の心がわからなかつた。女は女のあさましさ、人間の弱さを私に現はして私に强ひた。私の愛が薄かつた爲めか、女がより卑しかつた爲めか、私の愛から女ははづれて居たのだ。私は悲しく思つた。而して、女にいろ〳〵と云つて聞かせた。しかし女はそれだけでは、どうしても滿足はしなかつた。女も眼覺めて呉れたら、ゆるし合つて互に暮して行けたのだらう。けれども女は、「段々私から離れて行く」と云つた位だ。私はどうしても救ふ事の出來ない女を見て自分で自分の無力と不德を悲しんだ。而して私の生活の精進の對象をその女に置いた。で、一心不亂に、女の愛に對する考へを淨め樣とした。もう私には祈るより他になかつた。丁度其の時分だつたと思ふ。私が女を寺の一室に置いて、子供までも持つてゐると云ふ事が到頭檀家の方々や、宗門の人々に知れわたつた。人々は私を寺から逐ひ出すと云つてきかなかつた。私はその不當を感じた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

丁――そのお話は、あの鐘樓守のお爺さんから前に聞いた事が御座いましたが、さぞ御心配で御座いましたでせうね。

老僧――私は、自分の辯駁を心得てゐた。しかし成るべく靜かに解決がつけたかつた。成たけ爭ひはしたくなかつた。私は種々に心配をした。その心配を女が知つた時、女は私にすまない、こ思ひ出した。少しづゝ私の心がわかり出した。私は有り難いこ思つた。女はやつぱり具體的な事を見せつけられなくては、悟れないものだこ、私はその時思つた。けれごも私はごんなに嬉しかつたらう。ほん氣でゆるしを請へる心持にもなつた樣な氣がした。だから女が私から離れて家を持つこ云つた時も喜んで世話をした。

丁――今でもゐらつしやいますか。

老僧――この城下はづれに、小さな駄菓子屋のあるのは皆も知つて居るだらうこ思ふが、あれが、私のその女や子供の居る家なのだよ。（この時思はず甲こC子は顔を見合はせて不審の思入。）

丁――さようで御座いますか。…………それで、宗門の方は何うなさいました。

老僧――宗門の人々この解決も私が望んだ樣に行かなかつた。私の辯解でやつこすんだ樣なものゝ、私は恥しく思つた。やつぱり爭つてしまつたのだからね。云ひ譯を云つてはいけなかつたのだこ後で私は隨分苦しんだものだ。

丁――その女の方こお別れになつてから、御師匠樣はお寂しくは御座いませんでしたか。

老僧――女が離れてから、私は同じ町に居乍ら、女には一度も會はなかつた。もう二十年近くにもなるだらうがね。會はないでも心持ちよく暮せた。私はほんこに人一人を愛する事が出來たのを嬉しく思つた。而して佛樣にお禮を云ひ常に二人の幸福を祈つて來た。もう少しも互に傷付けずに抱合つてゐる事が出來るようになれてゐる。（こ晴々した樣な面持問）で、今甲は、私が京都に居た時分こ同じやうだ。戀より他には考へられないのだらう。而して戀に邪魔するものはみんな惡魔だこ思ひ、敵だこ思ふ。お互の戀は永遠の樣に思ひ、それが絕對の樣に思ふ。又お互に、いつまでもこ誓つて見たりする。…………それは尤だ。戀はさうしたものだ。しかし戀の危險も其處にあるここを知らねばならない。戀が直ちに罪惡こなるのもそこのこころだ。戀人のみを愛する心、それが、すでにほんこうの愛から離れた愛慾の罪ではないか。やつぱり我執だ、囚はれだ。愛、ほんこうの愛は博大で無限でなければならん。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

例へば太陽の光の樣なものだ。千人萬人に向けられて、それが千分され萬分される性質のものではない。戀人のみを愛する愛は眞の愛ではない。眞の愛の上に立たないものに永遠性のありやうはない。いつまでもと誓ふ心も罪とならう。もし誓の通らない時には、戀人同志は佛を呪つたり、相手を呪つたり、他人を呪つたり、而して自分等自身を呪つたりする。呪ふ心にお光りの宿らう筈はないのだからね。それならどうしたらいゝか。………………私は祈るより外に道はないと思ふのだ。お互に祈つてお互の運命を、又他の人々の運命を傷付けない樣にする外あるまい。それには戀人と他の人とにけじめを付けてはならない。これはお互の戀を薄くする樣な氣がする。しかし、その實戀はかうして初めて確實性永遠性が加はり純化され聖化されて行くのだ。私はこれだけは云ふ事が出來る樣に思ふ。(間)ねえ甲。お前の戀も、よく佛樣の御心に適ふ樣に心掛けてお呉れ。それにまで淨めておくれ。自分の戀のみ價あるものと決める我執から脱れておくれ。然しお前も自分を呪ひ壞はさない樣に用心しなければいかん。たゞ佛樣の御慈悲にすがつて自分達の戀のまどかな終りを祈りなさい。乙も甲達二人の戀を祝つてやつてお呉れ。これは隨分殘酷な言葉かもしれない。でも、私はお前の心はわかる。然しゆるしてやつてお呉れ。赦す心は尊い心だ。甲はお前から見れば、敵の樣にも見えやう。しかし敵をも愛する心にまで深くなつて行かなければほんとうではなからう。復讐は罪惡だ。それがどんな立派な、合理的に見える方法で行はれても罪惡は罪惡だから耐えてお呉れ。お互に呪はずに祝福してやつておくれ。

(甲、C子、泣き出してゐる。乙も面目なげにうつ向いてゐる。重苦しい暫くの間。)

老僧――ねえ、わかつたらう。皆な仲よくし合つてお呉れ。(老僧も涙をこぼす。又暫くの沈默。)

甲――(やつと)よくわかりました。有り難う御座います。私は隨分間違つてゐた樣に思はれます。………………私は心をこめて、一心不亂に祈ります。

老僧――さうしてお呉れ。私も二人のためにお祈りをしよう。

甲――有り難う御座います。

(この時遠くに又、人々の騷ぎ聲が、汐の樣に響いて來る。)

老僧——あゝ。また人の騷ぐ聲がする。若い女達でも連れて行かれるのかしら。何と云ふ恐ろしい事だらう。（氣を變える樣に、甲に）お前もさうした恐ろしい樣子を見て來たのかい。

甲——はい。諸所で。武士達は女を奪つて行かうとする、町の人達はそれをやるまいとする、その恐ろしさつたら。やるまいとする町の人達は斬られたり、突かれたりしました。

老僧——何と云ふ事だらう。でもお前達は幸福だ。そんな運命からも逃れる事が出來たのだからね。

C子——でも、私は自分が、さうした目を見るよりもつと恐ろしい有樣を見てゐりました。

老僧——と云ふと…………

C子——私が侍から追駈けられて、一生懸命で逃げたのですが城下端れまで來た時は、もう足が少しも動かなくなつて了ひました。それに息は切れますし、これはどうしても捕まる事かとうろたへました。と、丁度其處に一軒家があるのが目についたものですから、其の家に隱して貰うと思ひました。それで、夢中に叩きますと、家から戸を開けて中へ入れて下さいました。一人は五十位のお母さんと、もう一人は私位の娘さんでした。私は、やれ、助かつたなと思つた、その途端もう追駈けて來た侍が私の入るのを見たと見えて、戸を叩くではありませんか、私達三人は必死で戸を押へましたが、他の一人の武士も加はつて、到頭、戸を破つてしまひました。

（とあとが話せない程に恐ろしい追懷の幻影におびえる樣子。）

甲——C子を追つかけた侍のあとを私が追つかけて行つたのですから、戸を破つて侍達が中へ入ると、私も後から中へ這入つてその侍達と爭ひました。で、到頭一人の武士の刀を奪ひ取つて傷を被はせてしまひました。而してひるんで居る間に、C子を、やつと連れ出して逃げて來たのです。

老僧——それで、その二人の家の人はどうしたい。

C子——私は、それが氣がゝりでならないので御座います。きつと捕まつてゐるだらうと思つて。…………それも私が助けて貰はうとしなければ、あんな目に會はないでもよかつたのでせうもの。（と泣く）私は今も胸騷ぎがして仕樣がありません。

老僧——おゝ、それは氣の毒なことをした。氣の毒と云ふより恐ろしすぎる。きつと二人とも捕まつたに違ひあるまい。

（と涙ぐむ）

C子——それに、お師匠樣。私はなんだか、さつきお師匠樣のお話を聞いてから、そのお二人が…………お師匠樣の……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

……（と云ひかける。）

老僧——えッ。

（一同驚きの眼をみはる。）

C子——…………ではないかと、私氣がゝりでなりませんの。

老僧——私の云つた、その娘も今年は廿歳にもなつて居らうが（と一人言の様に云ふ）

C子——お名前は何と仰しやいますの。

老僧——名前は、私がつけてやつたのだ。A子と、…………

C子——えッ、A子？　あゝ、そゝそうだ。やつぱり。

甲——名前を知つてゐるのですか。

老僧——A子と云つたのですか。（思はずせき込む。）

C子——追手の武士が戸を開け様としたとき、お母さんがその娘さんに「A子、戸をおさへてお呉れ」と仰つしやつたのを、たしかに聞きました。あゝ、やつぱりさうだつた。あゝ、…………私はどうしたらいゝだらう。

甲——あはてゝゐましたが、駄菓子屋だつた事は確かに私も見ました。

老僧——おゝ。…………何と云ふ事だ。…………B子。A子。…………なぜ早く逃げて呉れなかつたのだ…………

甲——すみません。お師匠様おゆるし下さい。（泣く）

C子——知らないとは云へ、…………私が悪かつたのです。あはてゝ居たのですけれど、あんな事をすれば、他人が必ず迷惑を看ると云ふ事に氣がつかなかつた私が悪いのです。

甲——私も、C子許りを救はうと思つて、あとは考へなかツたのが悪かつたのです。あゝ私の戀は、眞んとの戀ではないのだ。…………あゝ呪はれてをれ。…………おゝさうだ。私は行つて見て來る。さうだ。さうしなければ…………

（と駈出さうとする。）

老僧——甲や、お待ち。いゝよ。いゝよ。

甲——でも氣がゝりです。どうなされたか。どうしても行かなくちや。

老僧——あぶないから…………

甲——なアに……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

老僧——いゝよ。もう行つても仕方がない。もう殺されたものなら殺されたらう。連れて行かれたものなら、連れても行かれたらう。…………あゝ殺されて呉れ。どうか、其場で…………私は…………

甲——どこまで、私は過失をするのだらう。（と獨白）

老僧——あゝ恥を被らせたくない。どうか死んでゐて呉れ。捕へられて連れて行かれた後のことは目に見えてゐる。考へても恐ろしい。私は敵の人々を呪はないでゐられなくなり出した。…………あゝ…………（思ひ返して）何と云ふ自分の不甲斐なさだらう。みんな笑つておくれでない。私は血迷つてゐるのだから。あゝ、私はゆるさなければならない呪つたりなどしてはならないのだ。私はA子やB子に、佛樣のお護のある樣にお祈りするより仕方がない。あゝ恐しい試みだ。この試みに堪へなくては…………（と口には云ふが、まだ苦悶の心）

丁——お祭し申上ます。

老僧——かうやつて別れて行くのだよ、人間は。別れたくない人にでも別れなくてはならない。しかしこれは、あまりに非道い。（と沈む）

（この時僧房の方の廊下から、第一幕の鐘樓守の老人かけ込む。）

老人——お師匠樣。丙樣は一體どうなされた。山門の傍で死んでゐますよ。

老僧——何、丙が？

丁——どうして…………

老人——今、又外が騷しいから、樣子を見ようと思つて、山門から一寸外へ出て見たら、山門から少し行つた處に丙樣が倒れてゐたんで御座いますよ。

老僧——もうすつかり、事切れてゐるかい。

老人——はい。矢が當つて…………もう亡くなつてゐましたよ。軍火事で一體に、ほんのりと、氣味惡く明るいので、月はありませんでしたが、よくわかりましたよ。

丁——丙殿は、ずつとさつき、不安にたへかねて町から逃れ樣と出て行かれたのだが…………

老人——では、その途中で、流矢にでも當つたのでせうかね。たつた今の事ではないらしう御座いますから。

老僧——さうかも知れない。

老人——可愛さうなことをした。

（つゞく）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

返照録

○水上ゝ子姉（大阪）　天香樣（かうお呼びすることをおゆるし下さい。）

突然未知のものから失禮な手紙をどうぞおゆるし下さいまして光をしたつて書かせていたゞいた、一女性の心をどうぞ御覧下さいませ。

さて何から申上てよろしいやら順序もなくのべたてます故、お判じの上お讀み下さいませ。なるべく簡單にしづかに書きたいと存じます、先づ私の今の境遇をお聞き下さいませ。私は今年十九歳になりまして、家はほんの名ばかりの米の小賣を其の日の生計としてゐます。父は十六歳の時なくなりまして、兄弟はなく、母と二人それに、店に若い人を一人手傳つてもらつてゐます二階には叔父夫婦が同居してゐます。私は今までどうしてもこの商賣に親しむ事が出來ませんので我から希望しまして女學校を卒業しますとすぐある所に勸めさせていたゞきました。時には商賣といふものゝあさましさに、ほんとに自分の力でなる事ならどうかしなければならないと思ひましたけれど、さてどうしてよいものかわかりません。母は大變氣が弱く、祈を唯一の便りとして、いそしんでゐますが悲しい事に信心と云ふものにとんと理解を持たず、又、金力萬能主義者なのでございます。そして私が素直に商業にいそしみ、着物をきかざり等すれば母にとつて一番嬉しいのでございます。時には私も我と我身を惰して、母の幸福のため、家のため、と思つて、それを樂しむ事に、努力しようと、おろかにも決心した時もございました。

丁度その時友から先生の「懺悔の生活」をお讀みなさいと言はれた時もありましたけれどわざと目を閉ぢて、讀みたくないと言つたのでした、あゝ今思へば、本當に惡魔のしわざとしか思へませぬ、そしてしばらくは過ぎて參りましたけれど、一たん飛び込んだ玉は、他からとられぬ限り、どうして離れる事が出來ませう。そして今偶然急轉直下の勢で光によつて、魂の眠りを醒ましていたゞきました。もう私は一燈園の門をくゞらずして、光がかすかながら感ぜられて參りました。

思へば今までの生活は眞に火宅の中にゐて、尙もその火を燃さうとしてゐた生活に外ならなかつたのでございます、過去のあらゆる煩悶、貪慾をきれいに包んでそつくりそのまゝ捨てゝ下さつて、裸の身をお光が包んで下すつた樣に思へてなりません、勿體ない事でございます。眼前にあらはれました世界の清さ、美しさ、まばゆいばかりの光に照されて私はぢつとしてゐられません。ゴムマリの樣にはづみます。遠い道と思つてゐたのが、あまりにも近かつた道程に、今更ビックリしてゐます。光の働いて下さるこの身が眞に勿體なく、からだ中がむづ〳〵致します。

先生、一燈園の門をくゞりたくてたまらなくなりました、このまゝ家にゐて、どうかするにはあまりに私は無智な樣です、又勇氣がないのでせうか、信心が足りないのでせうか。

一燈園へ參りたうございます。どうでもよいからだを、お役に立つならば報恩の爲に働かせて戴きたうございます。まだ〳〵惡魔のために、くもつてゐますこの心を先生を通して光に徹底させていたゞく道を敎へていたゞきたうございます。

先生、こゝまで參りました時、つきあたらなければならないものが……それは母でございます。母もともに光にすがりたい。けれど到底母に理解していたゞくのは難い事でございます、せめて私だけは光の御前に呼ばれまして、いつか母の盲の解ける日を待ちたうございます。

それにつきまして、今この場合どうして母を悲しませず、安心して出していたゞく事が出來るでせうか。母の涙を見る（下略）忍びません。どうすればよいか迷ひます。

大正十一年十月三十日印刷納本　代金
大正十一年十一月十五日發　行　廿錢
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
編輯兼發行
兼印刷人　中　桐　確　太　郎
印　刷　所　株式會社　一匡印刷所
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
發　行　所　東　京　宣　光　社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

大谷大學教授 山邊習學著

大地の聖者

これ親鸞聖人の信仰に生くる著者が、内にしては自分の心生活を色味し、感謝し、悲嘆し懺悔した記錄であると共に、外にしては廣く一般世相に加へた批判であり、考察である。著者は數年前印度に佛蹟を訪ね、更に歐洲に留學して佛敎の滋奥を究めたから足跡東半球に遍ねく、滯英中は親鸞上人の和讃を英譯上梓し、洋服に法衣を纏ふて道を傳へ名聲の布く所日本のみではない。今や親鸞上人の流行は漸く摯實の色を帶び、それを基礎とする人生觀社會觀の宣揚に迄進んで來た。著者は本書に於てその傾向の先鞭を付けたものと言ふべく、決して坊間流布の淺薄なる親鸞ものと混同するを許さない。

本綴函入美本 舶來晒製布装 價壹圓八拾錢 送料金拾貳錢

新刊好評

杉山榮著

社會苦の研究

本綴函入頗美本 舶來純洋布表紙 價壹圓八拾錢 送料拾貳錢

『罪と罰』の主人公ラスコルニコフは賣笑婦ソニヤの前に跪いて、汝が負へる人間苦のために禮拜すると言つた。今本書の著者は現在吾々の苦患せる社會苦を前にして如何なる態度を取つたであらう乎。著者は現在歐洲留學中なる社會學專攻の年少篤學者で、何等學閥の背景を有しないが、深奥なる研究は夙に識者を畏服せしめてゐる。

大地の聖者目次

一、親鸞日蓮二聖の開宗
二、空想の世界
三、苦みより生るる光り
四、自我の王國
五、清澤先生を想ふ
六、盂蘭盆經を讀む
七、素畫
八、大菩薩道
九、次郎助
一〇、生命と神祕
一一、世相
一二、實在の活現
一三、宗教的教化に就いて
一四、戰爭の意義
一五、迦留陀夷尊者
一六、生死のこゝろ
一七、海の人
一八、求めずは希はず
一九、信仰の樹立に就いて
二〇、心の閨
二一、人生の熱愛者
二二、提婆達多の宗教
二三、心を映す鏡
二四、戰ひの轉倒
二五、人生の逆觀
二六、愛し得ぬ悩みに就いて
二七、冬の日物語
二八、第三の天使
二九、落紅を弔うて
三〇、三種の生活

發兌元 東京市神田區表神保町拾番 春秋社 振替東京二四八六一 電話神田二一三八番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

新學藝講座(6)

新文藝講話

木村毅著

新刊

定價金壹圓
送料金八錢

文藝批評壇の新知識たる木村氏が廣く泰西最新の諸書を渉獵して立てた新らしい文藝の研究法を講じたのが本書である。從來の文藝論が徒らに理義の深遠と分類の精緻を倖んで、その煩瑣のために初學の士を謬らしめてゐたのに反し、本書は極めて内的に、心理的に、實際的にと心掛け、平明にして趣味多き幾多の例話を語るうちに、自づと文藝の本質に面接し得るやうになつてゐる。斯くの如きは從來殆んど類例のない所で、もし中學校女學校の上級の科外用敎科書として用ゐらるゝなれば最も好適なものであらう。

『文章倶樂部』に連載して好評を博せる講話の粹を集め、首尾統一し、新面目を以て出づ！

―本書目次―

前編
第一章 文藝の本質と使命
第二章 古典の研究
第三章 外國文藝の研究
第四章 What と How と
第五章 内容と外形と
第六章 高級文藝の特質
第七章 系統的讀書法
第八章 文藝と實生活との交渉

後編
第一章 創作家の資格
第二章 生活觀察の要義
第三章 技巧の意義と構想法
第四章 創作家と世間
第五章 作家と社會的接觸

トルストイ名著集

- 人生論　宮島新三郎譯　價八拾錢　送料金八錢
- 藝術とは何ぞや　木村毅譯　價壹圓　送料金拾錢
- 私の懺悔　細田源吉譯　價八拾五錢　送料金六錢
- 宗教とは何ぞや　加藤一夫譯　價七拾錢　送料金八錢
- 國民傳說　飯田敏雄譯　價六拾錢　送料金八錢
- 民話　春秋社譯　價金八拾錢　送料金八錢
- 家庭のための物語　木村毅譯　價金壹圓參拾錢　送料金拾錢
- 結婚の幸福　福永挽歌譯　價七拾五錢　送料金八錢

發兌元　東京市神田區表神保町拾番　春秋社　振替東京二四八六一　電話神田二一三八番

大正十年八月五日第三種郵便物認可　大正十一年十一月二日印刷納本大正十一年十一月[illegible]日發行（毎月一回十五日發行）『光』第十七號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN